

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)  
 大学院生研究  
 2008年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院		文学研究科	フランス文学専攻
指導教員	所属・職名		氏名	
	文学部・教授		澤田 直 印	
自然・人文の別	自然 ・ 人文		個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題名	光の束と微細なる粒子—ミッシェル・フーコーと周縁的テキストにおける生			
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	文学研究科・フランス文学・4年		千條 真知子 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
研究期間	2008 年度			
研究経費	200 千円			

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は二〇世紀を代表する思想家のひとり、ミッシェル・フーコー(1926-1984)を対象とする。フーコーはその探究において多岐にわたる著作を残しているが、とりわけ七〇年代に発表された「ピエール・リヴィエールの犯罪」や「汚辱に塗れた人々の生」といったテキストは、アンソロジー(引用集)という形式をとっており異色のテキストとなっている。これらのテキストの著者およびその対象者とは、犯罪者や精神を病んだ人々などなどであり、ほとんど社会的に疎外された存在である。フーコーは何故、彼らのような名をもたぬ存在とその痕跡に目を向けたのか、そこにどのような生が見いだされるのかを探るのが今回の目的である。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 生 ] [ 死 ] [ 現実性と虚構性 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

## IMEC 訪問について

2009年2月23日―2月27日にかけて資料収集のためフランス北西部の図書館施設(IMEC)を訪問した。この施設は以前パリ13区ソーショワール図書館にあったフーコーセンターの資料を引き継いだ施設である。

図書館ではパソコンに入った音声資料は自由に聞くことが出来た。しかし、こちらに関する量が多かった点と活字にされたものが一切なかったためにひたすら自身リスニングの力に頼るほかなかった点がやや問題であった。1日の滞在では到底対処できる量ではないことと自分が聞きメモとりしたものだけが頼りであり、確認作業が必要だということを感じた。一方で紙媒体の資料に関しては、自分がフーコーのテキストの改訳に携わっていたという事実が役に立ち、閲覧だけでなく一部のコピーも許可してもらうことが出来た。(未刊行の資料に関する閲覧、とくに複製に関してはかなり厳密に資料の必要性の説明とその具体的な根拠の提示を求められた。)一部、複製の許可がおりたのが、フーコーが非常に高く評価していたルネ・アリオによる「ピエール・リヴィエール」のフィルムの脚本である。映画とテキストが「同じ」というわけではないが、少なくとも単なる事実の再構成を求めたのではなかったという点においてフーコーのテキストとアリオのフィルムは同じ方向性を共有していると思われる。また、フーコーが生きていれば生誕80周年であった2006年にポワティエで開かれたコロックに関わる雑誌記事などもコピーすることが出来た。これらのインタビュー記事によりたとえば、『言葉と物』が上梓された1966年当時、学生だった研究者自身や大学のフーコー、ドゥルーズ受容のあり方なども伺い知ることが出来る。書簡に関しては管理が更に厳しく、残念ながら今回は閲覧することが出来なかった。これに関しては指導教官とも相談のうえ、再度申請をしたいと考えている。テープ資料に関しては、カセットデッキの状態に問題が多く(電池が入っていない、故障している、音がとても普通の再生音にならない等)4度交換してやっと聞き取ることが出来るものを出してもらえた。

この施設にはさまざまな研究者が訪問しており、食事時などそれぞれの研究について話し合ったりする貴重な機会も得ることが出来た。皆、気さくで好奇心ゆたかな人々で楽しい時間を過ごさせていただいた。

この施設が所在する北西部は、偶然にもピエール・リヴィエールの生きた場所でもある。カーン(この施設にほど近い)などは彼が逃亡中に彷徨っていた場所のひとつだ。実際にこの地方を訪れることによってノルマンディー地方の田園風景や農家のひとびと(声をかけられた)、冬の曇りがちな空の陰鬱さと時折そこからおりてくる光の神秘的な光景を目にすることが出来た。これもまた貴重な体験であったと考えている。

## ミッシェル・フーコーにおける周縁的テキストについて

ミッシェル・フーコーは、『言葉と物』、『知の考古学』、『監獄の誕生』といったあまりにもよく知られた著作の他にも様々な仕事を残している。今回、本研究において対象としたのが70年代に刊行された「ピエール・リヴィエールの犯罪」、「汚辱に塗れた人々の生」(対比列伝叢書の序文)といったテキスト群である。これらのテキストが発表されたのは、フーコーの関心が「知」から「権力」へと転回していく時期に重なっている。形式としてはアンソロジー、選文集という形式をとり、それらの引用に際してフーコーは出来る限り説明的文章を付さないようにしている。すなわち引用テキストが前面に打ちだされるように配慮されているのである。フーコー自身の考えとは別にしても、ミッシェル・フーコーという大思想家の書物としての『言葉と物』、『知の考古学』のような華々しいテキストに比して、引用されるテキストの著者たち、テキストに刻まれた者たちとは、ほとんど誰にも知られる機会をもちずに生きた人々であり、その引用とは無名の、匿名のテキストということになる。もともと、『言葉と物』のように広汎な読者を得た著作と比べても、「ピエール・リヴィエール」等はマイナーなテキストであり、周縁的なテキストであるが、これらの引用集の登場人物達もまた「名もなき人々」という点で周縁的存在なのである。彼らは明らかに「歴史」からとりこぼされた、忘却するにまかせられた存在にすぎなかった。しかし、フーコーは何故これらの人々の痕跡をしるしづける文書に目をむけたのだろうか。以下にいくつかの論点を提示したいと思う。

## 「汚辱に塗れた」ひとという概念について

本研究において考察の対象とした「ピエール・リヴィエールの犯罪」は1973年の出版であり、「汚辱に塗れた人々の生」の発表が1977年、この間に75年の『監獄の誕生』と76年の『知への意志』という著作を挟みこんだ形となっている。ピエール・リヴィエールとは1836年にノルマンディー地方の農村で尊属殺人を犯した弱冠20歳の少年の名前である。当時としてもこうした事件の重さは世間の注目を集めるのに十分であったし、実際、ひと

## 研究成果の概要 つづき

とき多大な関心を寄せられたにも拘わらず以後急速に忘れ去られてしまう点についてフーコーは指摘を行なっている。ピエール・リヴィエールの事件は新聞等のメディアを巻きこみつつ人々の恐怖と関心を増幅させたのだった。しかし、それは後に犯罪精神医学の古典とはならず、リヴィエールに関する言説は影をひそめてしまうというのである。これは後年の「汚辱に塗れた人々」と共通してくる部分をもつ重要な点である。(もともとリヴィエールは深い謎とともに行方をくらましたといったほうが良いのだろうか)「ピエール・リヴィエールの犯罪」のテキストにはまだ「汚辱に塗れたひと」についての記述は現われていないが、「汚辱」のテキストにはテキスト選択の要素が5つほど示されており、そのなかに「それらの者たちは世に知られた者ではなく、厄災に塗れた者でなければならない」(傍点部引用者)と記されている。彼らは現実に存在していたにも拘わらず埋もれてしまった存在なのである。しかし、忘却されつくしてはいるものの偶然が彼らを一瞬掴みとっていた。それがこれらの古文書記録なのである。フーコーはいつものように、現実にはありはしても人々の目に映らなくなっているものを引き出そうとするのだ。だから、同じ「汚辱」に塗れたはずの犯罪者であってもジル・ド・レやサド、ラスネールといった「名だたる」犯罪者は「汚辱」の示す範疇にははまらない。彼らは infâme ではなくむしろ fama (有名性) の一形態に属するとされるのだ。フーコーの語る、「汚辱」とはもっとささやかな、とるに足らないような凡庸さと呼応するように思われる。ひとつの生があり、それが恐らく間のわるいことにも法に引き止められる瞬間なのである。この権力の前でこの者は「剥き出しの生」をあらわにするほかはない。しかし、フーコーにあってこの生はただ消えていくだけの存在とは明らかに異なる何かとしてあらわれているように考えられる。ただほんの僅かに残された言葉のなかに、しかし軋るようにして無名の生の痕跡が確かに残されているのである。

(以下、紀要等の形で正式に発表します。)